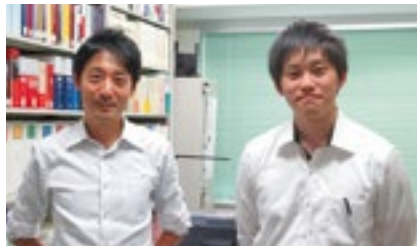


人文社会科学部 ニュース

人文社会科学部では、市民のみならずにもご参加いただける講演会をはじめ
様々な活動を行っています。掲載している内容は多様な活動の一部です。
興味を持った方はぜひ人文社会科学部ホームページをご覧ください。

◆ 法経政策学科の卒業生が、 平成30年司法試験に合格しました 〈2018年10月25日〉

人文学部法経政策学科法律コース卒業生の遠田智也さんが平成30年司法試験に合格しました。遠田さんは秋田県の横手高等学校を卒業後、2010年4月に人文学部法経政策学科に入学、2014年3月に卒業、2014年4月に東北大学法科大学院に進学されました。学部在学中から努力を重ね、今年の司法試験で見事に合格を勝ち取られました。



西岡先生(左)と遠田さん(右)

◆ マーケティングゼミナール3年生が 『外食インカレ2018』にて奨励賞を受賞 〈2018年11月29日〉

一般社団法人日本フードサービス協会、日本フードサービス学会が主催する「外食インカレ2018」は、「外食産業の未来を提案する」を課題にアイデアを競うコンテストで、マーケティングゼミ（指導 兼子良久准教授）3年生の石川玲菜さん、千葉柚香さん、深瀬理子さんのチームが『地方の食品メーカー×都市部のレストラン～レストランを通じて地方に貢献する～』をテーマとしてプレゼンテーションを行い、奨励賞を受賞しました。



表彰式の様子

◆ 寺子屋子ども大学が国際ソロプチミスト山形から表彰を受けました 〈2018年11月29日〉

松尾剛次教授が代表を務める寺子屋子ども大学が国際ソロプチミスト山形から表彰を受けました。
寺子屋子ども大学は、東日本大震災に伴う原発事故によって福島県から避難して来た子どもたちの学習支援活動やカウンセリング活動を行ってきました。2014年3月から松尾剛次教授が代表となり、主に山形大学の学生、教員らの協力を受けて実施してきました。



左から中澤信幸先生、松尾剛次先生、竹田隆一先生

◆ サマル国立大学(フィリピン)訪問団が来学しました 〈2018年12月7日〉

12月4日(火)、本学部と7月に協定締結をしたサマル国立大学(フィリピン)より、訪問団が来学しました。
今回の訪問において、お互いの大学等について改めて紹介が行われ、時間をかけた情報交換を行いました。訪問団の方々には、本学の国際交流会館や小白川キャンパス内の見学、国際交流担当理事との面談など、山形大学についてご理解いただく機会となりました。
また、サマル国立大学の学長からは紹介講演をいただき、学生を交えた交流を行いました。講演後には、参加学生からも活発に質問が出され、サマル国立大学からは本学への留学経験を持つ先生からのスピーチをいただき、有意義な講演となりました。



サマル国立大学の紹介講演

人文社会科学部の
今を伝える

Agora

人文社会科学部ニュース<アゴラ>
“AGORA”とは、ギリシャ語で“広場”という意味です。

50巻2号
山形大学人文社会科学部
2019.2.15

教員の研究を紹介するコーナー

ふぁんたすていっく！

現代の私たちの生活において、紙幣は非常にありふれたものになっています。しかし、紙幣が歴史に登場し、更に広く公衆の信用を得て社会に定着するまでには、各国、各地域で様々な紆余曲折がありました。モノとしてはほとんど無価値の紙を、どこで、誰が、どのようにして貨幣たらしめ、中央銀行が発券を独占する貨幣システムが定着し始めたのか、という問題について考えるとき、各国、各地域の歴史的背景と突き合わせて考察することが非常に重要になってきます。現在、何かと話題に挙がることの多い、ビットコインなどに代表される超国家的な仮想通貨に関しても、その性質を把握して正しく対峙していくためには、このような歴史的視野がきっと役に立ってくると思います。

私が具体的に研究しているのは、20世紀前半の中国の貨幣・金融史です。清朝末期から日中戦争期までの中国でどのような貨幣が流通していたのか、それをどのような金融機関が発行していたのか、またそれは当時の如何なる経済環境に規定されていたのか、などを研究しています。当時の中国では、成熟した中央銀行が存在しなかったため、政府系金融機関と民間金融機関がそれぞれ独自の紙幣を発行しつつ、

ある分野では競争し、またある分野では協力しつつ、紙幣や金融取引全体に対する効率性や安定性を高める努力をしていく必要がありました。これらは、完全に市場経済に依存したものであり、歴史研究として興味深いものであるのみならず、現在中国の社会主義市場経済を長期的視野で見えていく上でも重要な事項であると言えます。

このような歴史研究では、関連する連続した統計データを上手く加工して使っていくことはもちろんですが、大量の文書資料を読んでいく必要もあります。それらの文書資料は、初読では何を書いているのか全く分からないことも多いのですが、限られた統計資料や他の判読可能な文書資料から推理していき、最終的に一つの体系的な理解にたどり着く、そうしたパズル解きや探偵の真似事的(?)な面白さがあります。その中で、歴史的に新規性があり、且つ標準的な経済学の教科書ではカバーしていないけれども重要な事項を見つけることができた時の喜びは、非常に大きなものです。

経済・マネジメントコース
講師 諸田 博昭



1930年代の上海の外国銀行



現代上海の夜景



中国の在来金融機関「錢莊」

人文社会科学部ニュース 50巻2号

○発行／山形大学人文社会科学部 ○編集／人文社会科学部広報委員会 ○発行日／平成31年2月15日
〒990-8560 山形市小白川町1-4-12
https://www-hs.yamagata-u.ac.jp/ E-mail : jisoumu@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

※本学部の最新情報については、ホームページをご覧ください。【人文学部】<http://www-h.yamagata-u.ac.jp/> 【人文社会科学部】<https://www-hs.yamagata-u.ac.jp/>
※昨年度で退職・転出した教員のご挨拶は順次ホームページに掲載する予定です。



人文社会科学科長 **高橋 和**

人文学部が人文社会科学部になり、教育の面でも「実践科目」が本格的に始動しました。

またジェネリックスキルとしての情報処理や語学の能力を高めるための授業も必修となっています。こうしたなかでうれしいニュースがありました。兼子良久先生のマーケティングゼミの学生が「外食インカレ2018」に参加し、「外食産業の未来を提案する」という課題に対して、『地方の食品メーカー×都市部のレストラン～レストランを通じて地方に貢献する』という企画のプレゼンテーションを行いました。全国138チームを勝ち抜いて最終選考に残り、奨励賞を受賞しました。

グローバルスタディースコースで海外留学・研修が必修となったことを受けて、学生たちの留学先を確保するために、海外の大学との提携も進んでいます。フィリピンのサマル大学が新たに提携校となり、さらにメキシコ、タイ、ミャンマーの大学と提携に向けて準備を進めています。

研究では、「地域社会における安全・安心に関する学際的研究」に大杉尚之先生（心理学）を中心として、社会学、地理学、情報科学の学際的なチームが取り組んでいます。この研究は、誰にとっても住みやすい安心・安全な山形市にするための解決策を提案することを目的としています。

さらに、人文社会科学部の付属機関である「やまがた地域社会研究所」内に、5月11日、「安達峰一郎研究資料室」がウェブ上で開設されました。（www.hs.yamagata-u.ac.jp/laboratory/yamagata_adachi/）安達峰一郎は、第二次世界大戦前にアジア人として最初に常設国際司法裁判所の所長を務めた人物で、山辺町の出身です。在東京安達峰一郎記念財団や在山辺町安達峰一郎顕彰会の協力を得て、安達峰一郎に関する史料を収集し、整理しています。安達が目指してきた「法による平和と正義」を改めて問い直す研究を行っています。

各コース代表へ、「人文社会科学部への改組後約1年を振り返って」や「学生へのメッセージ」のテーマでインタビューをしました。

コース代表インタビュー



人間文化コース

渡辺 文生

人文社会科学部になり、最初の人間文化コースの学生が入学してから2年目が終わろうとしています。教員の立場から振り返ると、1年目は、まだ新体制の学生がみな1年生であり、新しい授業科目は1年生対象のものだけだったので、まだ余裕があるというか、新しい変化に対して慌てずに対応することが

できていたように思います。しかし、2年目になると、本格的に新しいカリキュラムが動き出し、以前にはなかったいろいろな手続きが必要になること、そして、そのためにいろいろな準備が必要であることがわかってきて、非常に慌ただしい1年でした。専攻の枠が、人文学部の人間文化学科と人文社会科学部の人間文化コースでは微妙に異なるので、旧学科の3・4年生と新コースの2年生がうまくつながりをつけているのかどうか、気がかりなところですが、新しい体制を充実させることは大切ですが、まだ存続している旧学科の3・4年生にも目を配ることを忘れないよう気を引き締めなければなりません。旧学科にせよ新コースにせよ、それぞれの学生のみなさんが充実した大学生活を送ることを心から希望します。

取り組んでいます。専門語学は、「英語強化クラス」を29名、「英語以外の外国語（独語・仏語・露語・中国語）の強化クラス」を23名が選び語学力向上に努めています。海外研修／留学を見ると、本学部主催の海外研修（台湾、ミャンマー、オーストラリア）で29名の1～2年生が研修を行い、協定校留学では5名の2年生が欧米・南米の大学で勉強しています。また、民間企業主催の海外研修等を認定する制度により3件の研修成果が認定されました。総じて、学問的興味も関心を寄せる言語／地域も多様ながら、1学年45名規模のコンパクトなグループの利点もあって、学生相互で刺激し合いながら勉学に励んでいる印象です。



グローバル・スタディーズコース

富澤 直人

本コースが発足して約1年半が経過した現在の様子を数字で紹介します。本コースでは2年次から教育プログラムを選択します。社会の現場から考えることを重視する「国際地域研究プログラム」は17名、ことばや文化を通して考えることを重視する「多文化研究プログラム」は32名が選び専門的な学習に



総合法律コース

コーエンズ 久美子

「少子高齢化」は、すでに「日常用語」のように定着し、さまざまな議論がなされていますが、近時よりいっそう具体的に、いかに生産年齢人口を増やすか、就労しながらの育児や介護をどのように両立させるか、といった問題についての解決策が求められてきています。他方、IT技術の進展により、私たちの生活が便利になりそうな反面、たとえば「偽装通貨」をめぐる新しい問題も発生しています。総合法律コースでは、こうした新しい社会的な制度、仕組みを作るために、また新たに生じる紛

争を解決するために、そしてますます多様な価値観を持った人々が共に生きていくために必要とされる法律知識、その運用能力を培うためのカリキュラムを用意しています。「想像力」を駆使しながら、教員や仲間との議論に参加してください。また法務実践科目（契約書の作成、法律相談、DVや同性カップルの生活保障など）を通して、実社会での法律の役割を是非、「体感」していただければと思います。



地域公共政策コース

下平 裕之

地域公共政策コースは、地域社会やコミュニティが抱えるさまざまな課題を適切に捉え、実践的な活動を通じてその解決に取り組む人材を育成することを目指しています。新カリキュラムが始まり約1年半が立ちましたが、公共政策・地域政策に関する専門基礎科目の履修が進むとともに、新たに地理学・社会学関連科目も開講し、さらに実践科目については山形市中心市街地、県内NPO法人、社会調査を対象とした3つのプログラムを実施することができました。本コースでは行政・企

業・住民の枠を超えて活躍できる知識・能力を身につけた地方創生の担い手となる人材づくりを目指していますが、その基礎となる素養を学生は身につけることができたのではないかと思います。

今年度からは専門展開科目とともに、主体的な学びの場として最も重要な専門演習も始まります。これらの科目の履修を通じて、学生が官民を問わず地域社会で活躍できる人材として成長してくれることを期待しています。



経済・マネジメントコース

岩田 浩太郎

経済・マネジメントコースは改組前の経済学・経営学を基本としたカリキュラムを継承し、さらに横断的教育科目や実践科目を充実した教育コースとして設定されました。

横断的教育科目とは関連する他コースの専門科目群を履修するもので、経済を基礎としつつも政治や法律、国際関係などの影響を受けて変化する社会を総合的に学べます。人文社会科学の総合学部であるメリットを活かした履修制度です。実践科目には企業課題解決やビジネス創業の演習があり、創業を

試み企業を観察するなど現場体験を積む科目です。

なぜ自分は生きているのか、自分は何者か。日々悩んでいる学生諸君もいると思います。人間は社会関係のなかで育ちます。社会科学を学問することは先人が社会のなかで如何に生きたかを学ぶことに繋がります。本学部・本コースの授業を活かして、自分が将来社会人としてどのような道を歩いていくかを是非模索してください。期待しています。

新任教員インタビュー

今年度人文社会科学部に着任した2名の教員に、人文社会科学部のことや学生へのメッセージなどいろいろ聞いてみました!

- ❶先生の専門分野について教えてください ❷人文社会科学部の学生の印象は?
❸学生にメッセージをお願いします ❹先生の出身地と、自由にひとことをお願いします



経済・マネジメントコース 准教授
かね こ よしひさ
兼子 良久 (マーケティング)

❶マーケティングを専門にしています。マーケティング分野の中でも、私が主なテーマとしているのは「価格」です。様々な商品やサービス間で、価格競争が頻繁に起こっています。過度の値下げや値引きは利益を大きく損失してしまうので、いかに価格競争を回避するかがビジネス上では重要になります。消費者の価格に対する意識や心理の視点から、企業が価格競争を回避する方法を中心に研究しています。

❷もちろん、一人一人個性があると思いますが、授業に真摯に取り組む学生が多いなという印象は受けました。教える側としても、とても良い環境で仕事をさせてもらっていると思います。

❸大学生の特権は、学業はもちろん、サークル、旅行など、様々な事を経験できる多くの自由な時間があることです。興味を持ったことには積極的に挑戦してみてください。また、社会に出ると正解のない課題に直面することが多いと思うので、どのような課題に対しても自分なりに考えて自分なりの解答を導き出す能力を、大学時代に身につけておいて欲しいと思っています。

❹生まれは東京ですが、父親の仕事の関係で、小学校を卒業するまでは宮城県石巻市に住んでいました。そのため、東北の地にはとても愛着があります。大学院を出た後は、東京の広告代理店に入社しました。忙しい業界でしたから、寝るために自宅に帰るか、会社に泊まるかといった生活でしたが、上司や先輩・後輩にも恵まれ充実した日々を過ごしました。現在でも、そこで教えられた事が、仕事に対する考え方や仕事の仕方のベースになっています。



人間文化コース 教授
かとう けんじ
加藤 健司 (比較文学)

❶最近是比较文学という、わかるようなわからないような分野の勉強をしています。もともとは近代ドイツ文学、とくに18世紀のヴィーランドというあまり日本では知られていない作家の作品を中心に読んできました。翻訳にもたいへん興味があります。

❷まじめでおとなしい、という感じでしょうか。とはいっても、ほとんど教室でしかお会いしていないわけですから、それもおそらくは学生さんたちの本当の姿のごくごく一面でしょうけど(笑)。

❸比較文学というのは、結局のところ、いま私たちが立っている日本語・日本文化を基本として、他者と自己を、人間というものを理解していこう、というような勉強だと思っています。ちゃんと日本語を知り、日本文化を知り、日本文学を知り、そして他の文化を支える言語と文学を勉強する、それが授業での目標です。あくまでも目標ですけど。

まあ、愉しく本を読んでいきましょう。

❹埼玉出身で、富山で20年ほど過ごしたのち、2010年に山形大に赴任して、地域教育文化学部の異文化交流コースというところにいました。というわけで、純粋な「新任」でもないのですが、人文社会科学部の授業ははじめて担当させていただいていますので、まあ新任です。宜しく願いいたします。

最近の趣味はなんといってもボクシングジム通いです。なわとび、シャドーボクシング、ミット打ち、サンドバッグ、ときにはスパーリング、いい汗かけますよ。

企業の経営課題に挑戦!! ～企業課題解決型実践演習aの紹介～

企業課題解決型実践演習aは、地域企業の具体的な経営課題に対して、調査やフィールドワークなどを通じて解決策を検討し、企業に提案します。演習を通じて、ビジネスに対する関心を高めるとともに、専門的知識を実践する能力を養うことが目的です。平成30年度からスタートした、株式会社コヤマ(山形県村山市)と、株式会社トヨタカローラ山形(山形市)と連携して実施している演習を紹介します。

◎コヤマからの課題

■ ■ 採用説明会で使える ■ ■ 企業パンフレットを提案する

コヤマは村山市にある製造業で、近年は新卒学生の採用を進めています。そこで若者の視点から若者の心に響くパンフレット作成、ただし製品は記載しないで作成することという課題が与えられました。「製造業なのに、製品紹介をせずにどのように企業の魅力を伝えるか?」という難題に対し、グループで検討しました。履修者は、経営者や従業員に対するインタビュー調査を通じて、ワーク・ライフ・バランスや社内の雰囲気、地域との関係という視点から企業の魅力を掘り下げたパンフレットを提案し、「実際に使用したい」「会社の雰囲気をよくとらえている」「親しみやすい」という評価をいただきました。



小山社長を囲んで
記念写真



小山社長へ
インタビュー



完成したパンフレット (一部)

◎トヨタカローラ山形からの課題

■ ■ 「地域と共に愛され続ける店」に ■ ■ なるには?

自動車ディーラーであるトヨタカローラ山形からは、持続可能な経営であるためにはどうすべきかというスケールの大きな課題が与えられました。履修者はまずこの課題をどの角度から分析するかをグループワークで検討し、ディーラーが取り組むべきこととして「若者の車離れ」と「自動車の安全機能の普及」というキーワードにたどり着きました。現在はアンケート調査と分析を行うとともに、ディーラー販売員への聞きとりやイベント見学を通じてディーラーの仕事への理解を深めながら、より具体的で実現性の高い提案ができるよう活動しています。



企業の課題や展望について
説明を受けました



グループワーク



店舗で販売担当の方に
インタビュー



最新のコネクティッド
カーを体験

異文化間コミュニケーション1 帰国報告

「異文化コミュニケーション1」は学部主催の研修として実施しており、2018年3月にはミャンマーで、2018年8月にはオーストラリアにおいて、それぞれ研修や実地調査等を行いました。



人文社会科学部では、昨年度より国外実習先としてミャンマーを新たに加えました。



人文社会科学部は、北部カチン州のミッチーナという町でユニークな体験学習の機会を提供しています。日本とは色々と関係の深いミャンマーでは、日本の大学からの実習が増えていますが、このミッチーナという北部の町には、小白川キャンパスで博士号を習得したミャンマー人大学教員が2人おり、山形大学と特別の関係にあります。

ミャンマー実習は、国際協力の諸問題を地元の大学生とともに学ぶという、フィールド体験型授業です。ミャンマー滞在中、山大生と現地大学生は、

各々の地域が直面している社会問題についてお互いに説明し合い、相互交流から多くを学び合いました。学習の内容は、帰国後に小白川キャンパスで開催された報告会で発表されました。選ばれたトピックは、結婚制度と伝統、若者の宗教観、民族衣装、言語多様性、内戦と平和構築、国際支援のあり方、と多岐に及び、学生の関心の高さが表れています。履修生はまた、帰国後もミャンマーの大学生と積極的に連絡を取り合い、交流体験で築いた友情を深めています。



Australia Cairns

8月25日～9月15日までオーストラリア、ケアンズにて異文化間コミュニケーション実習1を実施しました。

この科目の目的は、異文化の実相を実践的に理解することで、これまでに身につけてきた専門的知識や語学的能力を駆使し、異なる文化に直接向き合い、異文化理解に必要な方法を体験的に修得することです。

今回は30名の学生が受講し、ジェームズ・クック大学での3週間の英語研修のほか、世界自然遺産であるグレートバリアリーフや熱帯雨林、ケアンズのワニ園を訪れるな

ど様々な体験をしました。海外が初めての学生も多くいましたが、先生やホストファミリー、ジェームズ・クック大学の他学生との交流を通じて生きた英語コミュニケーションを積極的に行い体験し、その難しさを実感しながらも楽しさも満喫して、全員元気に笑顔で帰国しました。

なお、今回の実習は、ふすま同窓会からの費用補助も受けて実施されました。



地域とともに 今年度の公開講座

人文社会科学部では、学生だけでなく地域の皆様にもご参加いただける公開講座・学術講演会を実施するとともに、地方自治体や海外大学・研究機関とさまざまな交流をしています。

◇前期公開講座(人間文化コース)

記憶との対話 ことばとイメージ



本講座では、心理学、文学、歴史学、文化人類学、表象文化論の専門家が「記憶との対話」をテーマとして、人間の精神や文化をそれぞれの立場から分析しました。ことばとイメージはどのように過去の記憶を留め、文化となるのか、またそれらは現代のわれわれとの間にどのような対話(相互作用)を生み出すのか—これらの問いを通して、人文社会科学部の多様な活動内容と研究成果の一端をご紹介します。

- ▶ 十川陽一准教授
「都の記憶—日本古代都城のその後—」(6月4日)
- ▶ 大杉尚之准教授
「[エラー]と[バイアス]だらけの記憶—記憶と解釈の認知心理学—」(6月7日)
- ▶ 坂井正人教授
「モニュメントと記憶—古代アンデスの神殿・地上絵・都市—」(6月11日)
- ▶ 合田陽祐准教授
「いかにして記憶はアートになるか—クリスチャン・ボルタンスキーの場合—」(6月18日)
- ▶ 柿並良佑講師
「記憶を創る、記憶が創る」(6月21日)

【受講生の感想】

今回のテーマ、特にボルタンスキーの、精神にかたりかけるアート作品は、つくる側、レポートや研究、また、さまざまな分野の人たちが、そういう心がけをしていくことこそ、制作する本質なのだと、考えさせられました。

様々なジャンルの「記憶」について、いろいろな話を聴くことができ、とても楽しいけど面白かったです。

「記憶」について、様々な切り口から聴くことができ、本当に有意義な時間でした。

◇後期公開講座(経済・マネジメントコース)

新聞記事で読み解く法律問題— 法律って意外と面白いかも—



本講座では、民法・刑法・労働法・法哲学・国際取引法を専門分野にする教員が、それぞれの専門分野の視点から興味を持った最近の新聞記事を題材にして具体的に分かり易い講義を行いました。

日ごろから新聞記事で良く目にする法律問題の詳細やその背景を知ることによって、その問題の本質が見えてくるはずです。グローバル化や価値観の多様化が加速するわれわれの社会を考える上で、見慣れている法律問題に関する新聞記事をもう一度読み直してみることは有意義な事ではないでしょうか？

- ▶ 荒井太郎教授
「海外M&Aにおける法律問題」(9月18日)
- ▶ 池田弘乃准教授
「[性の平等]と日本社会」(9月25日)
- ▶ 西岡正樹准教授
「性犯罪の厳罰化」(10月2日)
- ▶ 小笠原奈菜准教授
「仮想通貨と消費者取引」(10月9日)
- ▶ 阿部末央准教授
「[働き方改革]と長時間労働—働きすぎは改善されるのか?」(10月16日)

【受講生の感想】

法律に関する諸問題、初めて聞くことばも多く、なじみにくい分野でしたが、それだけに新鮮だったし、知見を広げることができました。

実際、今現在は新聞を読むことなく、ネットニュースなどで興味のあることばかりについて目がいてしまっていて、知っておくべき法律問題からは目をそむけるか、スルーしてしまっていたが、今回受講することによって詳しくいろいろな問題を見ることができ、大変満足できた。
第2回「性の平等」と日本社会において、「追い詰められた最後の一人、法はこういう人のためにある」というフレーズが心に残った。

諸先生方の講義を聴くことができ私自身また学び直したくなりました。

ナスカだよ！

山形大学ナスカ研究所の最新情報をお知らせします。

日本アンデス調査60周年 記念シンポジウム:山形・東京・大阪

ナスカ研究所・人間文化コース 教授 坂井正人



日本人による本格的なアンデス考古学調査が開始されたのは1958年です。当時、東京大学文化人類学教室を中心にアンデス地帯学術調査団が組織されました。この調査団は、当初、アンデス文明の形成期(紀元前3000~紀元前50年頃)の神殿に注目して、ペルー北部高地において発掘調査を実施しました。その後、形成期以降の遺跡を含めた調査研究が行われ、現在、日本人研究者によるアンデス考古学調査は、ペルー各地で展開されています。

アンデス考古学調査が60周年を迎えることを記念して、今年度、日本各地でシンポジウムが開催されています。これらのシンポジウムの主催者もしくは共催者として、山形大学ナスカ研究所は参加しています。そこで、山形と東京で開催されたシンポジウムと、2019年3月22日に大阪で開催する予定のシンポジウムについて紹介したいと思います。

第1回のシンポジウムは「日本アンデス調査団と山形大学ナスカ・プロジェクト」(主催:山形大学、共催:国立民族学博物館)と題して、山形大学人文社会科学部において6月23日に実施されました。このシンポジウムの目的は、日本におけるアンデス文明の研究拠点である山形大学の研究・教育活動を紹介するとともに、それを日本アンデス調査団60年の歴史の中に位置づけることです。趣旨説明と司会を務めたのは井口欣也・埼玉大学教授です。

まずアンデス調査が始まった詳しい経緯について大貫良夫・東京大学名誉教授から説明があり、その上で、日本調査団が長年取り組んできたアンデス文明形成期の神殿調査の意義と成果について、関雄二・国立民族学博物館副館長から報告されました。

その後、山形大学ナスカ・プロジェクトについて、山形大学より以下の4つの報告がありました。(1)「日本調査団の歴史と山形大学ナスカ・プロジェクト」(坂井・松本剛・山本睦)、(2)「ナスカ地域におけるミドルホライズンの展開」(松本雄一)、(3)「ナスカ地域における古食性調査」(瀧上舞)、(4)「ナスカの地上絵はどこ



「日本アンデス調査団と山形大学ナスカ・プロジェクト」における阿部宏慈・山形大学理事のご挨拶

まで解明されたのか」(坂井)。また人文社会科学部が中心になって実施している文部科学省・大学の世界展開力強化事業(中南米)に関する紹介がありました(土井正樹)。

最後に、青山和夫・茨城大学教授と加藤泰建・埼玉大学名誉教授より、今回のシンポジウムに対するコメントをいただきました。当日の参加者は113名でした。

第2回のシンポジウムは「アンデス文明の成り立ちを追って—日本調査団の継承と発展」(主催:アンデス考古学調査60周年記念事業実行委員会、山形大学、共催:国立民族学博物館)と題して、東京大学で12月22日に開催されました。日本のアンデス調査団が一貫して取り組んできたアンデス文明の形成期神殿に関するシンポジウムです。坂井が趣旨説明と司会を務めました。

まず日本調査団の学術貢献および社会貢献について、「アンデス文明形成過程の探求:成果の蓄積と新しい展開」(井口欣也・埼玉大学)として報告があり、その後、近年重要な研究成果が得られたバコバンバ神殿とワスコ盆地の調査プロジェクトに関する報告が行われました。前者は「バコバンバ遺跡の発掘:権力生成の探求と遺跡保護をめぐる地域住民との共創」(関雄二・国立民族学博物館)で、後者は「コトシュ遺跡の時代と人びと:ワスコ盆地の編年と社会像の再検討」(鶴見英成・東京大学、松本雄一・山形大学)です。

最後に座談会「研究の到達点と展望—何がわかったのか、何を目指すのか」が、加藤泰建・埼玉大学名誉教授の司会で行われました。当日の参加者は147名でした。

第3回のシンポジウムは今年度末の3月22日に大阪で実施する予定です。「アンデス文明の起源を求めて—日本人研究60年の軌跡と展望」(主催:国立民族学博物館・毎日新聞社、共催:山形大学)と題して、オーバルホール(JR大阪駅前)で開催されます。



「日本アンデス調査団と山形大学ナスカ・プロジェクト」における 関雄二(国立民族学博物館副館長)のご発表

海外留学活動レポート

人文社会科学部から海外の大学に留学した学生に、留学先の紹介や留学先での生活や活動内容、感想、学んだこと、感じたこと、今後の大学生活にどう活かしていくか、など自由に述べてもらいました。

①氏名・所属・学年 ②留学先の国・大学・留学期間 ③留学先での活動レポート

①吉田実花／人文学部法経政策学科公共政策コース・3年②エストニア・タリン大学(6ヶ月)③私が留学したエストニアの首都タリンは、物価が安くて治安も良く、程よく都会で海は歩けばすぐそこにある素敵な場所です。英語で専門的な授業を受けるのは大変で、毎日予習や復習に追われていた日々を思い出します。余裕がある週末や連休は旅行に出かけました。ヨーロッパ諸国はとても旅行がしやすく、いろんな国を旅して、一人旅にも挑戦しました。

留学した半年間は、20年間実家以外に住んだことのない私にとって全てが新しく初めてのことばかりでした。海外での長期滞在、日本語のない生活、シェアルーム…。つらい



ルームメイトと近くの海に行ったときの写真

時期もありましたが、慣れ親しんだ場所を離れて生活することで、語学力を向上させることができたのはもちろん、いろんな国の人と出会い、様々な価値観、習慣、文化に触れ、人としても大きく成長できたと思います。「なん

From Yamagata University to the world



留学中に友達に祝ってもらった二十歳の誕生日



ルームメイトとルームメイトの彼氏とクリスマスマーケットに行ったときの写真

か雰囲気変わったね。」留学から帰ってきてよく言われます。留学で成長できた自分に自信を持って、就職活動や学校生活を頑張りたいです。

よって授業が進んでいくところが日本の大学の授業と異なる点だと感じました。

留学を経て、様々な価値観を持つ人達と関わることや新しい環境に身を置くことで、意識に変化がありました。日常の"当たり前"に疑問を抱いたり、今まで興味がなかったものに好奇心を持ったりと多様なものの見方をするようになったと感じています。また、「自分から行動し何でも経験してみる」ことの大切さを学びました。友達も、楽しい思い出や辛かったことも、全て自分が動かなければ得ることのできなかったものであり、その一つ一つによって今の自分があるので、経験は大きな財産だと思います。この先も、いろいろな経験を積み、成長していきたいです。

は、この留学をしなかったら得られなかったと思います。



課外授業の際にクラスメイトと地下鉄でバシヤリ

ケベック市にあるすべて水でできたホテル



ホストファミリーとバースデーパーティー



ケベックの友達とカボチャ狩り

所属していたバレーボールのsocietyで、試合の後に撮った写真

①菅原夏美／人文学部法経政策学科法律コース・4年②イギリス・ヨークセントジョン大学(10ヶ月)③私は、2017年7月末から約10ヶ月、イギリスの大学へ留学していました。本

①東海林舞／人文学部人間文化学科グローバル文化学コース・4年②カナダ・モントリオール大学(6ヶ月)③目が覚めるとキッチンから香るメープルシロップの匂い、窓から見える雪景色と分厚いコートで身を覆いながらバスを待つ人々。今でもその冬の寒さとそこで出会った多くの人々が忘れられません。

モントリオール市は、厳しい冬と国際色豊かな温かい人々に有名です。中心街は高層ビルと地下街が発達している一方、大学のある街は、地元の人たちがマルシェで立ち話をしているような、落ち着いた雰囲気があります。商店街には、レバノンのお菓子屋、ロシア食料雑貨店、ベトナム料理屋などが立ち並んでいます。

半年間のカナダ生活で、私は様々な国にゆかりを持つ人、異なった思想を持つ人たちと交流することができました。そしてそれは自



From the world to Yamagata University

①ヌルル・リヤナ・ビンティ・カマルザマン(マレーシア)②留学生として山形大学に入学する前に、もちろん様々な不安を持っていました。しかし山形大学に入学してから、思ったより山形大学は素敵な「居場所」だと思います。先生方をはじめ、友達、留学生支援センターの担当の皆様から温かい支援を受けています。留学生たちの日本での生活と大学での勉強の状態を知るために、たまに懇談会などが行われています。大学側は留学生たちのために様々なイベントも行ってきて日本人達との交流する機会を作ってくれました。また、山形大学の学生として、これは確かにかけがえ



多文化交流コンサート

①ニアムチャラーン・ニーラチャー(タイ王国)②自分の研究に関連する面白そうな授業がたくさんあり、美しい自然に囲まれたところに



指導教員の中澤先生、カナダからの留学生たちと、花笠まつりを観戦

①イザベル・ヒンケス(ドイツ)②山形に来てすぐ日本人たちと知り合いました。部活の練習に参加したり、皆と一緒に楽しんでいます。生活は楽しくゆったりしています。山形の自然はすごく美しいので、ときどき友だちと川のそばに行きます。授業がないときには、IFラウンジで他の留学生やチューター、他の日本人学生と話しますが、みんなすごくやさしい面白いひとたちです。週末にはときどき隣接する仙台市に友達と一緒に遊びに行きます。山形はずいぶん物価が安くいろいろなことができます。アルバイトを見つけるのもあまり難しくはなく、いまは和食レストランでアルバイトを

海外の大学から山形大学人文社会科学部に留学した学生に、山形大学や人文社会科学部(社会文化システム研究科)の良さや魅力についてお聞きしました。

①氏名 ②良さや魅力について教えてください



日本学プログラムの歓迎会

のない経験です。それは山形大学の魅力だと思います。また、自分が属している人文社会科学部の中では幅広い分野が含まれている



留学生懇談会

建てられているので、私は山形大学を留学先に選んで2015年に1年間留学しに来ていました。その後、タイに帰って大学を卒業したら、



河北町の方言調査実習に参加。山形の方言は本当に分からない!

はありません。ひとたび大学の門を通ると、家族の一員のように歓迎してくれるコミュニティに出会います。私の希薄な日本語コミュニケーション能力にもかかわらず、大学では先生方や学生たち(日本人も留学生も)が、日本での生活をサポートしてくれました。勉強



留学生仲間とチューターとラウンジで



留学生との交流パーティー



多文化交流コンサート山形から世界へ

ので、自分は様々なことを学ぶことができます。それだけではなく、人文社会科学部の学生たちから将来のことをよく考えさせられ、ある程度、卒業した自分のことを見通せるようになり、よかったです。

山形大学の修士課程を目指して頑張りましたが、ここに帰りたと思う一番大切な理由は、この大学には素敵なお客さんがいるからです。先生方、事務員、そして部活動や大学の活動で知り合った人たち。皆さんは、勉強や研究のことだけでなく、何か問題があれば、私達を全力で助けてくれて感動しました。このような環境に恵まれたところで勉強すれば、自分も頑張れる気がするのです、またここで勉強したかったのです。小さい大学ですが、小さいからこそ暖かい。これが山形大学の魅力だと私は思います。



ユネスコ無形文化遺産・新庄まつりを見に行きました

できる科目もさまざまあり、また学生の興味に応じてくれる熱心な先生方に囲まれています。山形大学の皆様のおかげで、貴重な経験ができたことに、心から感謝しています。



バレーボール部の学煮会にもさっそく参加



所属するバレーボール部の仲間と